
放課後ホーンテッド

陸点

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

放課後ホーンテッド

【Zコード】

N1145W

【作者名】

陸点

【あらすじ】

“学校の七不思議” 松露高校の新聞部部長である吉良美善は、他愛のない噂話だと思ってそれを取材し始めた。噂話の闇に潜む、“夜の住人”の存在を知らないまま。

学校の七不思議 1（前書き）

学校の七不思議って知ってるかい？

ううん？ 知らないの？

だったら覚えておくといいよ。

“奴ら”は夜の学校を支配しているんだから。

「と、言つわけであつ、今度の新聞では『学校の七不思議』を取り上げることにしたよつ！ 学舎くん、何か質問ある？」

「悪い、全然聞いてなかつたわ。最初から頼む」

「えええええつー？」

「ずこーつ、とホワイトボードの前で吉良が盛大にずつこける。大きな丸眼鏡がずれ、おさげが絡まつた。

「もう、学舎くんが書記兼副部長なんだからしつかりしてよつー。」

「悪い悪い。で、なんの話だつけ？」

「だ、か、ら！ 『学校の七不思議』だつてばつー。」

眼鏡をきつちりかけ直し、吉良は「とにかく！」とホワイトボードをばんばん叩く。教室の四分の一程度しかない部室なんだから、いちいち怒鳴らなくともよく聞こえるんだがなあ。

「最近生徒たち、特に女子の間で怪談話が流行つてゐるんだよ。ここ相当古い校舎だからそういう話には事欠かないし。だから今度は『学校の七不思議』の特集をすれば、いつも読まない人も手に取つてくれるかも！ ……つて話

「あー、そうだつたな」

俺はすかさず手元のノートに『七不思議特集』真夏の夜のデートスポーツ！？ 彼氏とドキドキ 恋もドキドキ』などとメモを取つた。いや、別に書くほどのことじやないと思つうが、いじつないと吉良がつるわいから。

「そつと決まれば、早速下調べしなくちゃねー。学舎くん、宿題だよ？ 次の部活までに七不思議を調べられる程度まで調べてくることー。」

「はいはい」

ちょうど校時間のチャイムがなり、俺たちは帰り支度をする。

「……あれ？ 学舎くん、帰らないの？」

「あー、図書室に本返すの忘れててな。先に帰つてろよ」

「うん……」

吉良はどことなく寂しそうな顔で階段を降りていく。その姿が見えなくなるのを確認してから、俺も目的地に向かうことにしてた。

学校の七不思議、ね。

俺の名前は学舎学徒がくしやがくと。吉良、吉良美善みよしが部長を務める新聞部に所属している。

もつとも、部員は俺と吉良の一人しかないので、本当は『新聞同好会』と呼ぶのが正確なのだが、吉良が強情に『部』の看板を降ろさないのだからしようがない。

活動内容は、月一で新聞を発行し、所定の掲示板に貼り出したり図書室などに置いておくこと。掲示板から剥がされたことが一度もないことと、図書室に置いた分が全く減らないことでその人気は推して知ることができる。

まあ、いっちは好きでやつてんだし気にはしていない。吉良は気にしているようだが、それならまず部員を増やして記者を増やすべきだろ?。

あれは、そんな風に吉良と新聞を作るよつになつてから、一年目の夏のことだつた。

「学舎くん、宿題はちゃんとやつてきた?」
「まあな。七不思議以外にも色々調べたぜ」
「じゃあ、早速報告会ね!」
机を寄せ、ノートを広げあつ。
「七不思議その一。裏庭にある桜の木で毎年誰かが首を吊る。通称
“首吊り桜”」
「おお……いきなりホラーでサスペンスだね……」

「七不思議その一」。夕方、二階の渡り廊下を通ると、猛スピードで走る死神に追いかけられる。通称“滑走する死神”

「爆走とか暴走とかじゃないんだ……」

「……おい、吉良は何も調べてきてないのか?」

さつきから頷いているだけだったので訊いてみると、吉良は慌てたように「そ、そうだねつ」とノートのページをめくる。

「あつあつた! 七不思議その二」。旧校舎には亡靈がいて、それに出合うと一生旧校舎から出られなくなる。通称“迷いの旧校舎”だつて」

「じゃ、続いてその四。夜な夜な生物室の骨格標本が動き出して実験をしている。通称“解剖するドクロ”」

「解剖……蛙とかフナとかだよね……?」

「さあな。そういえば、飼育小屋のウサギがときどきいなくなるらしいが……」

「やめて、それ以上は言わないで!」

「……あー、悪い」

ちなみに飼育小屋は小さい穴が空いていて、そこから小柄なウサギが脱走するらしい。

「もう。七不思議その五! 美術室には誰も描いた覚えがない絵があつて、真夜中にそれを見に行くと、絵の中に吸い込まれちゃうんだつて! “人食い絵画”って呼ばれてるよ」

「その六。プールで泳ぐと昔そこで溺れて死んだ生徒に足を引っ張られる。通称“溺れた人魚”」

「人魚なのに溺れちゃつたんだ……。えーと、これで最後だね!」

その七。使用されてない教室には幽靈が住み着いていて、ときどき別のクラスの授業に混ざつてたりするんだつて。通称“知らない同級生”」

「これで七つか。」

「……なんか、思つてたより怖い話が多いなあ……」

「そりや、七不思議だからな」

むしろ、怖くない七不思議のほうが少ないだらつ。

「とりあえずこれだけだと情報が少なすぎるから、詳細も調べてき
たんだが……」

「さすが学舎くん！ 我が新聞部の精銳だけあるねー！」

「精銳と言えるほど選りすぐれられてないだろ……」

「部員数：一人で何いつてんだか。」

「……あんまり付け加えるようなことはなかつたぜ。精々、死神は
ローラースケートを履いてるらしいとか、同級生は願いを叶えてく
れるらしいとかなんとかぐらいだ」

「死神つてローラースケート履いてるのー？」

「いや、俺に訊かれてもな……」

それはさておき、とりあえず七不思議について一通りノートに
まとめる。

「うーん……やつぱり実際に取材してみるしかないのかな……」

「取材つて、七不思議をか？」

「うん。百聞は一見に如かずつて言つてしょ？ 聞いたことをそ
まま書くより、体験したことを書くほうが読者の心を動かせると思
うんだ」

「おお。珍しく記者っぽい」とを。

「でも、夜中に起つてタイプのはぢりすんだよ。夜は当然、校門も
生徒玄関も閉まつてるんだぜ？」

「あ、そつか……。うーん……じゃあ、そこはわたしがなんとかし
てみる」

「なんとかつてなんだよ」

「なんとかするんだよつ」

説明になつてねえ。

「そんなわけで、今日はこれで解散！ 七不思議については、まだ
調べられることがあつたら調べてね！」

「りょーかい」

まだ下校時間までは少しあるな。図書室にでも行くか……。

「ねつ、ねえ学舎くん！」

「……なんだ？」

妙にそわそわした吉良に呼び止められる。

「あ、あのね……今日は一緒に帰らない？」
学舎くんって、電車通学だつたつけ？」

「…………」

「あー……これはまずいな……」

「悪い。今日は急用があつて早く帰らなきゃならないんだ」「だ、だつたら途中まででもいいからつ。本当に一緒に帰りたいだけなのつ」

何故食い下がる。しうつがない、じうつなつたつ……。

「あー、校庭でつうのがウサギをキャトルミゴーティレーショーンしてーーー！」

「えつーーー？」

今だつ！

俺は吉良が校庭に氣を取られてこむつて、急いで部室から飛び出した。

「つうのなんていしないじゃない……あれ？ 学舎くん？」

後ひに吉良の声を聞きながら、俺は階段を駆け昇つた。

「やあ、久しぶりだね。吉良さんは元氣にしてる？」

図書室に滑り込むと、くつくつと笑い声が聞こえてきた。

「いたのか、”魔女”？」

「うん？ いや悪かったかい？ ひどいなあ、僕はいつだつて」

貸出カウンターの指定席に腰かける、ボコボコとした奇妙な帽子を被つた女子生徒 “魔女” は、頬杖をついて俺に胡散臭い笑みを見せる。

「それはそうと、今度の新聞は“七不思議”について書くんだつて

？ 教えてくれたら僕も色々協力したのに」

「……どこから聞いたんだ、その話」

「まあ、 “七不思議” については僕より学徒君のほうが詳しいか。あはは、 釈迦に盆踊りを教えるようなものだね」

「…………」

“魔女”は基本的に人の話を聞かない。自分が言いたいことを言えたらそれでいいらしい。

「新聞は楽しみにしてるよ。この学校の愚民はろくに田も通さないらしいが、吉良さんの書く記事は素晴らしい。是非とも続けてほしいものだ」

再びくつくつと笑い、“魔女”は俺から視線を逸らした。そして虚空を眺めたまま、「そういえば」と独り言のように呟く。

「最近、この学校の生徒が何人か失踪しているらしいね。君は何か知ってるかい？」

「いや……聞いたことはないが……」

「ふうん……だとしたら七不思議とは関係ないのか……。僕はてつくり、“死神”あたりが何人かさつくり殺っちゃったのかと思つてたよ」

「どうせ、家出かなんかを大袈裟にいつてるだけだろ。一、二日もすれば戻つてくるじゃね？」

「それならいいんだけどねえ？」

意味深に微笑む“魔女”。くそ、そつやつて無駄に訳知りぶつて楽しいかよ。

「おつと、もうこんな時間か」

下校時刻のチャイムが鳴る。“魔女”は大きく伸びをしてカウンターから出た。

「図書委員として一応訊くが、何か借りたい本はないよね？」

「いや、ない」

時間潰しに来ただけだしな。

「そうかい。じゃ、僕は帰るよ。ばいびー」

「…………」

「ぱいびー」

「ば、ぱいびー」

「うん。じゃあね」

「…………」
「今日一番の清々しい笑顔を見せて、“魔女”は図書室から出いで
つた。

「…………んじゃ、俺も行くか」

図書室のドアを開け、俺は夕日が差し込む廊下に足を踏み出した。
住處に帰るために。

続く

学校の七不思議 1（後書き）

ホラーを書きたいと思いました。前に書いていたそれらしきものは思いつきり場外ファールしてしまったもので。

というわけでホラーです。これから頑張ります。まかり間違えて展開が場外ファールしてしまいかもしれませんが、暖かく見守ってくださつたら幸いです。

学校の七不思議 2（前書き）

もつとも恐ろしいのは人間だ、なんてよく言つけど。
お化けだと幽霊は、その恐ろしい人間が死んで生まれてくるわけ
なんだよね。

吉良美善が松露高校に入学してきたとき、彼女が入るうとしていた新聞部は既に廃部となっていた。

なんでも、前年の卒業生が最後の部員だつたらしい。その年の文化祭で、展示されていた新聞を見て進学を決めた吉良にとつて、それは想像だにしていい事態だった。

だが吉良は諦めなかつた。彼女は見た目ほど、大人しそうな優等生ではなかつたのである。

部員が一人以上集まれば部活動成立、という甘すぎる基準に目をつけた彼女は、早速部員勧誘を始めた。

だが、物事はそう上手くいかないもので、入学してたかだか数日の彼女には頼る人もコネもなく、部員は全く集まらなかつた。

そんなときだつた。彼女が“知らない同級生”的を聞いたのは。

放課後になり、いつものように部室へ行くと、部室の前で吉良が誰かに叱られていた。

「まったく、何を考えているんだ？ いくら取材でも夜中に学校に入るなんて、許可できるわけないだろ？

「すみません……」

見かけは二十代後半で、くしゃくしゃの天パ……確かに、浦賀真先生、だつたか？ 一年の英語を担当していたような気がする。

「先生、どうしたんですか？ うちの部長がなんかやらかしましたか

とりあえず声をかける。

「ん、君は……」

「学舎です。新聞部員やつてます」

「学舎君か。念のため君にも言つておくが、夜に出歩いたり学校に

忍び込んだりするんじゃないぞ。最近、物騒な話が聞こえてくるからな

「そういえば昨日“魔女”が何か言つてたな。失踪がどうとか……。」

「それから君」

「なんすか？」

「前髪は切つたほうがいい。みつともないぞ」

「…………はい」

「ほつとけ。」

浦賀先生はそれだけ言つと、部室の前から去つていつた。

「うーん……やつぱり駄目があ…………」

「一瞬でも駄目じやないと思つた根拠を知りたいよ、俺は」
まさか先生にストレートに頼むとは。

「…………とき、普通はどつかの鍵を開けておくとか、思いきつて合鍵を借りるとか、そういうもんなんじやないか？」

「そんなの駄目だよ。勝手に学校に忍び込むなんて犯罪じやない」

「…………」

俺はときどき、このことは善人なのか、それともただの度を越した

馬鹿なのかわからなくなるときがある。

「…………だったらもうどうしようもないだろ。夜の取材は諦めたほう
がいい」

「だつ駄目だよつ！ 諦めたらそこで取材は終わっちゃうんだよ！

「？」

「……やっぱこいつ馬鹿だ。」

「じゃあどうすんだよ！ お前は一体どうしたいんだよ！？」

「わわっ……ごめん……」

「謝りんでいいからわっせと考えりー。」

「はい……」

はつ、いかんいかん。怒鳴つてびつする。

「…………あー、すまん。言い過ぎた」

「ううん、わたしも全然考えてなくて」めんね。そろそろ、部室に

入ろ?」

そういうや、まだ廊下で話してたんだつたな。部室に入つて、いつものようにノートを広げた。

「うーん。先生にも駄目つて言われちゃつたし、取材は放課後だけにじよつか。あとはもつと情報を集めて、[写真つきで紹介するの」やつと吉良がまともなことを言つた。

「まあ、それが妥当なところうな」

「そつと決まれば、早速取材だよ!」

「もう行くのかよ」

即断即決つてレベルじゃねえぞ。

「あんまりぐだぐだしてると、記事を書く時間がなくなっちゃうからね。学舎ぐんも歩き回る準備してね?」

「はいはい」

せつかく出したノートは速攻でしまつ羽目になつた。

裏庭にある一本桜、通称“首吊り桜”の噂。

昔々、まだこの土地に松露高校が建つてなかつたころ。とある恋人たちが些細なことで痴話喧嘩を起こし、カツとなつた男のほうが女を殺してしまつた。男は恐ろしくなり、誰にもバレないよう人に気のない野原に女の死体を埋めた。

しばらくして、そこには鮮やかな花が咲く桜の樹が生えた。周りには桜どころか樹もろくに生えてないような原っぱだつたが誰も気に止めず、そこは花見の名所となつた。

桜が生えて何度目かの春、男がその桜の枝に首を吊つて死んでいるのが発見された。言つまでもなく、女を殺した男だ。

家族に訊くと、桜が生えた頃から「別れた女が夢枕に立つて恨めしそうに睨んでくる」という夢を頻繁に見ていたらしく、死ぬ数日前はつわ言のように「女が、桜が……」と呟いていたらしい。

きっとそれは祟りだ、女は殺されたのを恨んで男を祟り殺したの

だといふ話になり、それからその樹に近づく者はいなくなった。

首が吊られた田の桜は、いつも以上に鮮やかな赤色をしていたといふ。

「……そんなおどりおどりしい逸話があつたんだねー……」

吉良が桜に「デジカメを構えながら呟いた。当たり前だが、花はもう咲いていない。

「逸話ならまだあるぜ。」この樹の前で一緒に弁当食つたカツプルが数日で別れたとか、ここに告白すると両思いでもフられるとか、彼女に酷いフリ方した奴がここで首吊つたとか

「うわ、逆伝説の樹、って感じだね……」

一方で、モテない奴らからは“御神木”として崇められているらしいが、それはまあ関係ないな。

祟ると崇める。字面が妙に似てるな。

「でも、本当に立派な樹だよね。樹齢はどのくらいなんだろ?」

（カツプルを別れさせちゃう気があ……わたしと学舎くんはまだ付き合つてないし、告白もしてないから大丈夫だよね、うん）
桜の平均樹齢はどれくらいなんだろうか？俺はソメイヨシノは短命なことくらいしか知らない。

（カツプルを別れさせちゃう気があ……わたしと学舎くんはまだ付き合つてないし、告白もしてないから大丈夫だよね、うん）

「ん？ 吉良、今なんか言つたか？」

「う、ううん！ なんでもないよ！」

拳動不審気味に首を振る吉良。おさげがぶんぶん揺れていった。

「……あれ？」

「どうした？」

吉良が俺の後方を指差す。

「あそこ、煙が出てない？ 火事つてわけじゃなさそうだけど……」

確かに、少し離れたところから一筋の細い煙が昇っていた。

「」の季節に焚き火、ってわけでもないだろ？……気になるな。行つてみるか？」

「うん」

そこに近づくにつれて、煙に混じつて妙な臭いがするようになつた。炎天下に数日放置した生ゴミを焼いてるような、臭くて氣分が悪くなる臭いだ。

「……なんだ。焼却炉に火が点いてるだけだね」

煙は昔なつかしの、ドラム缶のような形をした焼却炉から出いでた。どうやら何か焼いているらしい。

……………ん？

「妙だな……この焼却炉、どうの昔に使用禁止になつてたはずだぞ。第一、何焼いたらこんな臭いが湧いてくるんだ？」

紙や木じやこんな臭いにならないはずだし、調理実習で出た生ゴミは専用の機械で肥料にされてたはずだ。

「え？ ちょっと、何してるの、学舎くん！？」

「何つて……開けるんだよ。なんか嫌な予感がする」

焼却炉の蓋の取つ手部分は金属で出来ていて、触れたら火傷しそうだったので、適当な棒で引っ掛け開けることにした。

「嫌な予感がするなら止めとこうよ……」

「嫌な予感が外れであることを確かめるためにやるんだぜ？ 」
で止めたならモヤモヤするだろ？」

吉良の正論をシカトして、近くに落ちていた太めの枝で取つ手を引っ掛け、開ける。

「つ……」

大量の煙と熱が吹き出し、思わず顔を逸らす。数秒もしないうちに煙は薄くなり、俺たちは熱い炉の中を覗きこんだ。

「……ひ、いつ、いやあああああああああああああああああああ！」

吉良が悲鳴をあげ、その場に座り込んだ。正直、俺もそうしたい

気分だつた。

「……なんだよ。なんなんだよ、これは……ツ！？」
いや、“それ”的正体なんて一目瞭然だ。俺はその事実を認めた
くないだけだつた。

炉の中で未だ燃え続けるその肉塊は、ヒトの足首の形をしていた。

しばらくして落ち着いた俺たちは、先生がたにこのことを報告した。

なかなか信じてもらえなかつたが、吉良がデジカメで撮った写真を見せた途端職員室は騒然とした。

噂になつたらまずいのだろう、このことは他言無用だと釘を刺され、俺たちは下校させられることになった。

「でも、結局……その、誰の足だつたんだろ？　あれ……」

下駄箱に行く道すがら、デジカメを握り締めたままの吉良がそう呴いた。

「さあ？　多分、行方不明になつた“誰か”じゃないかな？」

そう答えたのは俺ではない。目の前に、いつものように不格好な帽子を被つた女子が立つていた。

「魔女……」
かんなぎ
「鉋木さん……」

“図書室の魔女”こと、鉋木真女のお出ましだった。

「お前、どうしてそれを……」

「ちょっと職員室の前を通りかかつたら聞こえてしまつてね。大丈夫、誰にも言わないよ」

全然信用できない笑顔だつた。いつ、「シップとか噂とか好きなんだよなあ。

「心配しなくとも、警察の皆さんがどうにか身元を捜してくれるだろ？　ま、あの先生たちがちゃんと通報したらの話、だけどね」

「何言つてゐる、鮑木さん。通報しないわけないじゃない。事件なんだよ、ジケン」
“魔女”の皮肉がわからなかつたのか、真剣な顔で吉良が反論する。

「あ……うん、そうだね」

“魔女”も対応に困つたようで、曖昧な顔で返事をした。

「ところで、ちょっと学徒君を借りていつていいかな？ 頼みたいことがあるんだ」

「学舎くんに？ だつたら、本人に訊きなよ」

「もつともだ。

「俺は別に構わないが……」

「じゃ、一緒に図書室まで来てくれないかな？ そういうわけで吉良さん、また明日。新聞、楽しみにしてるよー」

「えつ、あ、うん。また明日ねー」

吉良は何故かどことなく悔しそうな顔で手を降つていた。

「……さて。君が吉良さんを撒けなくて困つていたようだつたからいつわせてもらつたが、これで良かつたかな？」

「……あー、正直、助かつた」

いつもだつたらなんだかんだ言い訳してやりすごすのだが、今日は上手い言い訳が見つからなくて参つていて。最近は特に、吉良が何故か一緒に帰りたがるし。

「……もしかして本氣で気づいてないのかい？」

「ん？ 何がだ？」

「…………なんでもないよ。それにしても、まさか死体を焼却炉で焼くとはね。単純だが実に効率的な処理方法だ。焼いてしまえば、大抵の証拠は残らない」

“魔女”が帽子を被り直しながら言つた。

「なんの話だ？」

「例の“足”的話だ。僕は十中八九、あれが行方不明の生徒の誰かのものだと思つてゐる。ついでに言つと、その誰かを殺して足だけ

にしたのは、この学校に通う誰かだとも

「……やめてくれよ。推理、ここならコナンでも読んでろ」

「つづん？ 僕は本気だよ？ だって怖い話じゃないか。いつか僕や吉良さんだつて“行方不明”にされるかもしれないんだよ

確かに“魔女”的は本気だつた。

「でも、あれがお前の言つ“行方不明”的奴とは限らないだろ。そもそも、本物の人間の足だつたのか？ 誰かが悪戯で、生肉かなんかで作つた偽物だつておかしくない」

「ううん？ 自分で見たことを疑うのかい？」

「なんでもかんでも悪い方向に結びつけるよりはマシだろ」

人を疑うより自分を疑つたほうが、社会で目立たず過ごせるのだ。

「ふうん。学徒君は卑屈だねえ。まあ、すぐにわかるさ。あの足は誰のものだつたのか、誰がどうして焼却炉に足を捨てたのか、ね

「だといいけどな……」

“魔女”鮑木と歩く廊下。

そこから見える裏庭の桜は夕焼けに染まつて、赤い花びらが満開に咲いているように見えた。

学校の七不思議 2（後書き）

今ひとつ怖くあつませんが、いよいよホラーっぽくなつてきました。
次回もこんな感じで七不思議を巡つたり足の謎を追つたりする予定
です。

学校の七不思議 3（前書き）

幽霊の正体見たり枯れ尾花。

妖怪だの八百万の神だのの大半は、そういうた錯覚や勘違いから生み出されたものだ。

ま、だからといってそういう存在が全て架空の存在と決め付けるのはまだ早いよ。

幽霊は案外、枯れ尾花の下に隠れているだけかもしれない。

俺たちが例の“足”を見つけた翌日、案の定と云々かなんというか、校内はその噂でもちきりだった。

「やつぱり言い触らしやがったな、『魔女』の奴……」

人の口に戸は立てられない、ってやつなのか？

まあ、見つけたのは俺たちだという情報が広まつていよいのは、あいつなりの優しさなのかも知れないが。

「いっそ、今度の記事は七不思議よりも“足”について書いたほうが読んでもらえるかもな？」

ほんの冗談のつもりで、吉良にそう言つてみた。すると、吉良は本気にした顔で、「だ、駄目だよ！」と叫び。

「最近、暗い出来事が多いから、せめて校内新聞くらいは平和で、読んだ人が元気になるようなものを書かなくちゃ！」

あんまり必死な顔だつたから、思わず少し笑つてしまつた。「なんで笑つてるの！」と怒られた。

ほんと、頭に『馬鹿』を三つ並べてつけたても足りないくらい真面目だよなあ、こいつは。

……しかし、七不思議は平和で読んだ人を元気にできるよつた話題なのか？

ま、それはさておき。

俺たちは三階の、東校舎と西校舎を繋ぐ渡り廊下に来ていた。例の、“滑走する死神”に追いかけられる廊下である。

「見た感じ普通の廊下だよね」と、吉良が言つ。

「なんでそんな物騒な噂が広まつてゐるんだろ？」

“死神”的噂。

夕方、この廊下を通り、背後からシャーツ、シャーツと何かが滑るような音が近づいてくる。

振り向くと、そこには誰もいない。気のせいか、と思つて再び歩

きだすと、やはりシャーツといつ音がする。

この音が近くまで来ないうちに廊下を渡りきればいいのだが、もし追いつかれ、音が自分の前方から聞こえてくるようになつたら、その音の主、すなわち“死神”に殺されてしまつのだといつ。だから、この廊下を通るときは、なるべく立ち止まりずに急いで通らなければならぬ、らしい。

他にも、“死神”は真つ直ぐにしか進めないから、追いつかれそうになつたら曲がり角を曲がつたり教室内に入つたり階段を昇り降りすると撒けるとか。

「なんで真つ直ぐにしか進めないのかな」

「さあな。ローラースケート履いてるから、とつさに曲がれないから、つて聞いたが」

シャーツという音もローラースケートの音なんだろう、きっと。「でも、何回か夕方にここを通つたことはあるけど、そんな音聞いたことないなあ」

吉良がデジカメを取り出しながら言つた。

「多分、風の音だろうな」

「風？」

「ああ。ちょっと待つてろ」

廊下の片側の窓を少しだけ開けていく。大体開け終わり、少し待つ。今日は風が強かつたし、多分大丈夫なはずだ。しばらくすると風が吹いてきた。

シャアアアアアアアアアアアア

「！」、「この音……！」

「枝がどつかを引っ搔いてんのがどうなのか、音の出所はよくわからんねえが、ここは風が強い日だといつ音がするんだよ。この音を聞き間違えた奴が広めたんだろうな」

「……でも、なんで夕方なんだろ？」

「知らん。朝とか昼とかじゃあんまり雰囲気出ないからじゃね？」
こういう類いの話は、大体夕方から真夜中つて相場が決まつてゐる
しな。

「うーん……あんまり釈然としないけど、まあいつか
吉良がシャツターを切つた。

「じゃあ、次に行こつか。次はどこだつけ？」

「あー、次は確か　」

お次はここ、旧校舎だ。

昭和一桁代に建てられたかのような、古び、朽ちた木造校舎。と
うの昔に立ち入り禁止になつていて、玄関にはきつちり鎖と南京錠
が巻かれていた。

「入るのは難しそうだね……」

「窓も雨戸だったので封じられてるし、こりや無理だな」
壁はボロボロなので何回か体当たりでもすればぶち破れそうだが、
それはいくらなんでもそれはまずいだろうし。

「迷いの旧校舎」……だつたつけ。確かに、まだ立ち入り禁止じ
やなかつた頃、ここに女子生徒が迷いこんで、それつきり見つから
なかつたつて……」

「それ以来、一度旧校舎に入ると死んでも出られなくなつたつて言
うが……これじゃ、入るも何もないよなあ」

そんな噂がたつたから、こうして立ち入り禁止になつてるのかも
しれないが。

「とりあえず、写真だけでも撮らなくちゃね。ここ暗いから、フラ
ッシュ焚かないと……」

吉良がデジカメをいじりだした。ただでさえ北側なのに、太陽を
遮るような位置に東・西校舎が建つてるので、まだ日が沈んでな
いのにかなり薄暗い。

「はい、チーズ……つて、あれ？」

「ん？ どうした？」

吉良がデジカメの画面を覗いて首を傾げている。

「今、玄関の内側に誰か立つてなかつた？」

旧校舎の大半の窓は中が見えないようになされているが、玄関の扉のガラスだけはそのままの状態だつた。

「さつき、フラッシュ焚いたとき、一瞬誰か居たような気がするんだけど……」

「気のせいじゃないか？ フラッシュの反射光で、俺たちが、ガラスに映つちまつたとか」

「そりなのかなあ？ うーん……」

吉良は納得がいかないらしい。

「考えたつてしようがないだろ。次行こうぜ、次

「う、うん……」

未だ玄関を気にする吉良を引きずるようにして、俺たちは旧校舎を後にした。

次の七不思議スポットである生物室に向かおうとしていた俺たちだつたが。

「ねえ、あれ浦賀先生じゃない？」

吉良が指差したのは飼育小屋のほうだつた。特徴的な天パ頭が飼育小屋の隣で何かしている。

「浦賀先生、何してるんですか？」

吉良が近寄つて声をかけた。俺も近寄ると、浦賀先生が顔を上げる。

「ああ、君たちは確か新聞部の……取材でもしてるのか？」

「そんなどころです。先生は？」

先生は握つていたスコップを俺たちに見せた。

「お墓を作つてゐるんだ。ウサギのな」

「ウサギの……？」

「最近、ウサギがパタパタ死んでるんだ。何か病気が流行ってるのかもしれない」

浦賀先生はウサギの墓穴を掘っていたらしい。穴は結構深く、一メートルくらいは掘っていた。

「そりなんですか……ウサギさん……」

吉良はウサギみたいなふわふわした動物が好きらしいから、結構ショックなのだろう。

「でも、ちょっと深く掘りすぎじゃないですか？」

「はは……つい掘るのに熱中しちゃってな」

あー、あるよなそんなこと。嫌々草むしりしてたら一つの間にか楽しくなつてたり。

「もうすぐ死骸を埋めるから、君たちは早く帰りなさい」

「はーい」

浦賀先生に追い払われる。まだ帰るつもりはないが。

「ウサギが次々に死んでく病気……ちょっと怖いなあ……」

「確かに少し不気味だな」

たとえ小動物でも、死骸を見るのは気分が悪い。ウサギのことを話しあいながら、今度こそ俺たちは目的地に向かつた。

「あれ？ 生物室、鍵が掛かってるよ」

俺たちがぐずぐずしているうちに、生物室の扉は閉められてしまつたようだ。

「しようがないな。そろそろ下校時刻だし、明日にしようぜ」

「そうだね」

俺たちは部室に戻る。校内に人気はほとんどなかつた。

「な……何これっ！？」

俺より先に部室に入った吉良が、驚いたよつた声をあげた。

「どうした？」

次いで、俺も部室に入る。

「これは……！」

部室が、まるで強盗に入られたように荒らされていた。机が倒され、床に資料が散乱している。棚にしまってあった本や新聞はぐちゃぐちゃで、元の状態を保っているものはほとんどなかった。

「何これ……何これ……ひどいよお……。部室がしつちやかめつちやかじやない……」

吉良がへなへなと座り込んだ。

「イタズラにしても酷いな……」

「一体、誰がこんなこと……？」

誰がなんのためにこんなことをしたのか。それは今のところ知りようがない。俺たちが今するべきことせ、この惨状を片付けることだった。

「もう、犯人が見つかったから『ふん』と言わせてやるんだから……」

「『ぎやふんてなんだ、『ぎやふんつて』」

「ギーヤーとか、グエーッとかでもいいけど」

「昭和のギャグ漫画かよ」

軽口を叩きあいながら掃除する。机を元に戻していくと、机の中に、何か紙切れが入っていることに気がついた。

「…………？」

取り出して広げてみると、ボールペンで英文が殴り書きされていた。

『Curiosity killed the cat!』

「く、くつおしてい……？」

駄目だ、わからん。英語はどうも苦手だ。辛うじて『くつ』が猫を殺した『までは読めたが……どちらにしろ、あまり良い英語アンスの言葉ではないようだ。

「？どうしたの？ 学舎くん

「あー、いや、なんでもない」

吉良のことだから、『猫を殺す』という部分に妙な反応を示しそうだ。俺はとっさに紙切れをポケットに突っ込んだ。後で鉋木あたりにでも意味を訊くとしよう。

「鉋木、これなんて読むかわかるか?」

吉良と別れ、例の『』とく図書室にいた“魔女”にあの紙切れを見せてみた。

「キュアリオシティ・キルド・ザ・キャット……ふうん?」

鉋木がいつも異常にニヤニヤ笑つてこちらを見てくる?

「なんだよ?」

「いや……君たち、どうやら誰かから恨みを買つていろいろしいねえ?」

「…………」

鉋木はカウンターから立ち上がり、本棚に向かう。持つてきたのは、『英語ことわざ慣用句辞典』という辞書だった。

『『Curiosity killed the cat』……邦

訳すると、『好奇心は猫をも殺す』だ

「好奇心が、猫を?」

「聞いたことないかい? 猫は九つの魂を持っていると言われている。奴らなかなかしぶといから、そんな非科学的な迷信が生まれたんだろうね。

で、Curiosity 好奇心以外にも詮索という意味があるけれど、つまり、そんな不死身の猫であっても、余計な詮索をするのは命取りだ、という意味だね

「…………」

「ま、噛み砕いていうと、これを書いた人は君たちに『余計な詮索はするな、分をわきまえろ、藪をつつくな蛇出すな』と言ったかつたんだろうね」

冷水を浴びせかけられたような気分だった。

「……これを書いた人のあてはあるのかい？」正直、君はまだしも

吉良さんが恨みを買うとは思えないんだが

恨み……部室を荒らしてこんな警告文を残しておくような動機

。

「……“足”、だらうな。他に心当たりはない」

「まあ、そんなとこだらうねえ。ヘタレで卑屈な学徒君が、人を傷つけられるわけがないもの」

「……それは言い過ぎじゃないか？」

しかし反論はできない。

「じゃあ、精々気をつけなよ。君はともかく吉良さんはか弱い女の子なんだから、守つてあげないとねえ？」

「こいつはどうして当たり前のことをここまで癪に障る言つて方で言えるのだろうか。

「……お前だつて女の子だろ。夜道には気を付けるよな」

「！」

鉋木が突然赤面した。

「な、なんだ。僕のことも気にかけてくれるんだ？」

「まあ、そんな言動でしかもちろんこんな帽子被つてるような女、誰も襲わないだろうけどな」

「……さつきのときめきを返してくれないか……？」

落胆した様子で図書室から出でていく鉋木。ちょっと言つて過ぎたかもしだれない。

それにして、『好奇心は猫をも殺す』か。

もしかしたらあのとき俺は、パンドラの箱でも開けてしまったのかもしだれない。

……箱に残っていたのは明らかに希望から程遠いものだったが。

学校の七不思議 3（後書き）

怖さが出せない…
頑張ります。

学校の七不思議 4（前書き）

不気味の谷つて知ってるかい？

ほら、人間を模したモノが、あんまりにも人間に似すぎているとそれには恐怖を感じてしまうつてヤツさ。

人形とか、最近開発されているリアルな人型ロボットとかね。

ヒトじやなくせにヒトを真似ているなんて、確かに不気味だよね。

でも、なんでだろうね？

ヒトがモノを真似るのは、滑稽にしかならないのは。

埃が積もる床の隅を、小さなクモが這つていいくのが見えた。

……ひづり、と喉から声が漏れる。どうして、どうしてこんなことに……！

自分は今、追い詰められている。まだ事件が完全に明るみになっていないから、きづきりでなんとかなっているが、このままでいるのが、このままではいけないから。

くそつ、この間までは上手くいっていたのに！ あんなミスを犯してしまったばかりに、自分の運命はいまや風前の灯火だ。安っぽい教訓じみた状態だが、いざ体験してみるとそんなことは言つていられない。反省する時間も後悔する猶予も残されていないのだ。

……待てよ？ どうして自分が、反省や後悔なんてしなければならないんだ？

元はといえば、あの一人のせいじゃないか。新聞部の取材だかなんだか知らないが、校内を歩き回った挙げ句、余計なことをしてくれた。せめて大人しく黙つていればいいものを、学校中に触れ回つて。現在のピンチはあの一人がもたらしたものじゃないか。

焦りに代わって怒りが首をもたげてくる。そうだ、あいつらのせいだ。あいつらのせいだ……！

あいつらに報いを与えてやらなければ。反省や後悔をするべきなのは、あいつらだ。

足元を這つっていたクモを思いきり踏みつけて、自分は立ち上がった。

生物の先生の許可を得、俺たちは放課後生物室に入ることができた。

「でも、嘘ついたやつたね……」

「しょうがないだろ。『夜動くともっぱらの噂の骨格標本を取材しに来ました』で許可貰えるわけないだろ」

「だから、『生物室で飼っている動物たちを新聞で紹介したいの』と真っ当そうな理由をでっちあげたわけだが。

「そのうちちゃんと記事にしたら、嘘にはならないよね」

本当に面目な奴だなあ。どうせ誰も読んでない新聞なんだからバレやしないのに。

そんなことを考えながら生物室の奥、部屋の隅にひつそりと隠されるように据えられた骨格標本の前に立つ。

一メートル前後の木製ケースの中に、バラバラの骨を針金や金具で繋ぎ、人の形に整えてある標本が入っている。この標本、どういうわけか白衣が羽織らされていることから、一部の生徒からは『D・ドクロ』というダジャレじみた愛称で親しまれているらしい。

「確かに、この骸骨は本物の人骨でできている、って噂があるんだつたね」

吉良が、骨格標本から微妙に視線を逸らして言った。

「ああ。なんでも、生前は人を解剖するのが大好きなマッドサイエンティストで、だから夜な夜な動き回って、生物室に近づいた人間を捕まえて解剖する……って噂もあるな」

「……前聞いた時よりも話がおどろおどろしくなってない？ 話がぐつと詳しくなってるし」

俺に言われてもな。この手の噂は尾ひれが付きまくるもんだし、聞いた話を総合したらそりゃ詳しくもなる。

「でも、本物の骨から標本つて本当に作れるの？ 普通、遺骨つて焼いちやうでしょ？ それに、その噂が本当ならそんなものがなんでこの学校にあるの？」

「だから、俺に訊くなつて」

ただの噂に整合性なんて求めるな。

「……ただの噂つてわかつても、やっぱり不気味で怖いなあ。早く写真撮つて出よう？」「

吉良が骨格標本に向かつてシャッターを切ろうとしたそのとき、

骨格標本の顎の骨が、ケタタタタ…、と鳴った。

「ひやあああつ！？」

吉良が両生類に触られたかのような悲鳴をあげた。

「まッ、学舎くん……今、骨が……ツ！」

「……落ち着け。風かなんかで揺れたんだろ」

「え……でも……なんで顎の骨だけ……」

「それよりいいのか。今の写真、確實に手ブレしていると思つや？」

「……あ、……ああーつ！」

デジカメのファイルを確認した吉良が、さつきとは違つ意味で悲鳴をあげた。

「ブレブレだあ……これじゃあ超色白のガリガリに瘦せた人にしか見えないよ……。撮り直さなきや……」

「どんなブれ方したらそう見えるようになるんだ？」

ともかく、なんとか吉良の気を逸らせられたようだ。

たかが骸骨が動いた動かないで時間を潰してもしょうがないからな。

「それで、今度はちゃんと撮れたのか？」

「うん、ばつちり！」

さつきの出来事をすっかり忘れたように、なんとなくタンポポを思わせる顔で吉良が笑う。

「そりやよかつた」

こんなこと本人には照れ臭くて言えないが、俺は吉良が撮った写真が好きだ。プロのようにしつかり的を射ているわけではないが、ややピントがボケたその世界は、現実よりも優しく穏やかそうに見える。

俺がもし新聞部に入らず、新聞部が成立していなかつたら、吉良は写真部に入つていたんじゃないだろうか。

もしもの話を考えたつてしょつがないが。

「次は美術室だつたな。さっさと行こうぜ」

「うん！」

生物室を出ていく間際、俺は例の骸骨を一瞥した。
まったく、余計な手間を取らせやがって。

美術室には普通、有名な絵画や彫刻のレプリカや、生徒が作った作品が展示されているものらしい。

しかし、この松露高校の美術室には、一点だけ、正真正銘本物の美術品がある。

それが題名『舞踏会の淑女』、通称“人食い絵画”だ。

内容はタイトルの通り、華やかな舞踏会の中、美味しそうな料理が載るテーブルの前で一人微笑む青いドレスの女性を描いたものだ。誰が描いたのかは不明。少なくとも美術を習つて十年もないような高校生が描けるものではないだろ？ 昔の美術の先生が描いたのを飾つただけとか、どうせそんなとこだと思う。

で、噂によると、この絵には悪霊が取り憑いており、真夜中になると本性を現してその時間まで学校に残っていた不届き者を絵の中に引きずり込んでしまうらしい。

舞踏会の様子をよく観察すると、何人か舞踏会に似つかわしくない格好の人間がいるのがその証拠だとか。

「胡散臭え……」

なんともテンプレート通りな怪談だ。さつきの骨格標本といい、もう少しなんとかならないのだろうか。

悪霊が取り憑いた絵つて。もつと他になんかなかつたのか？

「悪霊……」

そんなので怖がつて吉良も一体なんなんだ。

「……悪霊が本当かどうかはさておき、舞踏会で変な格好してる人つてどこら辺に描かれてるのかな。人、沢山描かれてるから、ちょっとした『ウォーリーを探せ』みたいになつてるけど……」

確かに、背景の人間がわらわらにすぎて、この中から特定の誰か

を探すのは至難の技だろ？。

「だからそんな噂が流されたんだろ？な。嘘かどうか確かめられまい、つて」

「えー、そんな性格悪い人いるかなあ？」

「いるわ。どこにでもいる」

本当に善良な人間と、善良なふりした小悪党、果たしてどっちが多いだろうか。

「良い人のほうが、絶対多いよ」

「何を根拠に」

「根拠はないけど……でも、根拠がなかつたらそういう信じじやも黙目なのかな？」

「…………」

「何も知らないくせに、簡単に言つてくれ。」

「あれ……わたし、何か気に障ること言つた？」

「いや……なんでもない。大丈夫だ」

今までの努力をふいにしてでも、吉良にぶちまけてしまいたくなれる。

全てを。本当に。

ただのハツ当たりにしかなりようがないのに。

「ごめんなさい、怒らせちゃったね……」

「あー、いや、大丈夫なんだ、本当に。謝らなくていい。」しつこい悪かつた

絵の前で無様な謝りあいをする。絵の中の女性は優雅に微笑んだ。まだが、内心では鬱陶しく思つていることだろ？。

結局、今日はほとんどろくに取材をしないまま、下校時刻になってしまった。

「あれ、みよちーじやん。こんな時間まで何やつてんのよ？」

美術室を出て部室に向かつていると、階段の踊り場で吉良が声を

かけられた。

「あ、知朱ちゃん！わたしは部活だよ。知朱ちゃんは？」

知朱、と呼ばれたのは、明るい髪をポニー・テイルにした女子生徒だった。左右の目元に特徴的なほくろがある。どこかで会った気がするが、思い出せない。

「部活う？てことはそここの田隠れクンは、吉良が必死で口説き落とした部員第一号さん？」

「やめてよ、恥ずかしいよ」

「……吉良の知り合いか？」

初対面で人を“田隠れ”呼ばわりする人間に知り合ひはない。

「うん。同じクラスの松前知朱ちゃん。親友なんだ」

「そゆこと。みよちーが可愛いからって手を出したら、アタシが黙つてないわよ～？」

出でねえよ。お前は吉良のなんなんだよ。

「もう、知朱ちゃんつたら」

「冗談よ。ところで、前にケーキが美味しいお店教えてくれるつて約束、覚えてる？」

「……あ」

「やつぱり～！もう、いつ紹介してくれるのかつて楽しみにしてたのよ～？」

「「ごめん……」」 そうだ、今日行こー 今日大丈夫？」

「その言葉を待つてたんだからー 大丈夫に決まってるでしょー？」

「……」

キヤアキヤアと女子特有のテンポで会話する吉良と松前。ついていけねえ……。

「あー、その、なんだ。女だけで帰るんなら、気をつけろよな」

「学舎くんは来ないの？」

「甘いもんそんなに好きじゃないし。一人で約束したんなら、一人で行くべきだろ」

「そつか……ごめんね」

今日の吉良は謝つてばつかだな。

「じゃあわたし、荷物取つてくるからー！」

ぱたぱたと吉良が階段を駆け上つていく。

「……アンタにしちゃ、結構大事に扱つてるみたいね？」

「…………？」

松前が、どこかで見たような意地悪げな顔で笑いかけてくる。
「なんだかへんなのに絡まれてんでしょ？ アンタはともかく、み
よちーに何かあつたらタダじゃ おかないとんだからね？」

「？ どういう意味だ」

「お待たせー！」

戻つてくるの早つ！

「んーん、全然待つてないわよ。早く行きましょ？」

「うん。学舎くん、また明日ねー！」

「おう。また明日な」

吉良と松前が階段を降りていく。

……なんとなく、その後ろ姿が羨ましかった。

彼女に会うためにこうなつたわけじゃない。

だが、彼女に会えたのはこうなつたおかげだ。

……いつまで隠し通せるだろうか？

いつまで、俺は彼女の前でヒトでいられるだろうか？

もう、そんなに時間は残されていないのかもしれない。

胴体が半分潰れた小グモが、嘲笑うように床を這つていくのが見
えた。

学校の七不思議 4（後書き）

油断するとすぐ「メモディ」に傾いてしまいます。
そういうクライマックスなので『矢を引き締めねば』。

学校の七不思議 5（前書き）

もつとも効果的な、殺人の隠蔽の仕方って何かわかるかい？
簡単だ、死体を発見させないことだよ。そりやそうさ、そもそも死体が見つからなければ殺人“事件”にはならないからね。
自殺に見せかけたり、不可能犯罪に見せかけたり、ミステリみたいなびっくりトリックを知恵を搾つて考えたりする前に、まず死体を隠す努力をするべきなんだ。

事実、公になつていないだけで、そうやって隠されて今も見つかっていない“行方不明者”はごろごろいるんだろうね。

わたしね、実は“知らない同級生”に逢つたことがあるんだ。と言つても、顔は見てないし、話したこともないんだけどね。あは、これじゃ逢つたつて言えないかな。

学舎くんに会う前、まだ新聞部ができてなかつたころ、どうしても、部設立のための部員が集まらなくつて。

そのとき、“知らない同級生”の噂を聞いて、ちょっとしたおまじないのつもりでやるうつと思つたんだ。噂、あんまり信じてなかつたし。

だつて、『一つ何か大切なことを忘れる代わりに、一つだけ願いを叶えてくれる』なんて、ちょっと都合が良すぎるでしょ？でも、ここに学舎くんがいるつてことは、願いを叶えてもらえたつてことなのかな。偶然？ そうかもしれないけど。

だけど、もし本当に全て“同級生”さんのおかげだとしたら。わたしは一体、何を忘れたんだろう？

当然の話ながら、まだ夏どころか梅雨にも入つていないこの時期にプールが開放されているはずがない。

俺たちにできるのは精々、しつかり施錠された入口の前や高い壁に隠されたプールの周囲をうろつるることぐらいしかない。

“人魚”さんつて……確かに、水泳部のエースだつたんだよね？」

どんよりと不機嫌な空模様を気にしながら、吉良が呟く。

「らしいな。それこそ半分魚なんじゃないかって言われるほど、泳ぎが巧かつたとか」

現在、この学校には水泳部は存在しない。廃部になつた年と“人魚”の噂が囁かれるようになったのが同じ年なので、『水泳部は“人魚”が滅ぼした』なんて噂も流れている。

“人魚” 彼女がまだ人間だつたとき。

彼女は水泳部のエースで、全国大会に出場するほどの実力を持つていた。

しかし、三年の夏に些細な事故で脚に怪我をしてしまい、その夏は大会はおろか普通に泳ぐこともできなくなつてしまつた。

そのことに悲観した彼女は、学校のプールで入水自殺してしまつ。それ以来、プールで泳ぐと何かに足を引っ張られて溺れかけることが度々起こるようになつたといつ。

「そういえば私、去年泳いだときに急に足が痛くなつて、うまく動かなくなつたことがあつたんだけど」

「……それ、足つつただけじゃね？」

そんなことまで自分のせいにされたら“人魚”もたまらないだろう。

「んー、でもあれは確かに……」

ぽちゃん、とプールから水の跳ねる音がした。数秒遅れて、地面上に小さな水玉模様ができるはじめる。

「わわっ、雨降ってきた！？」

「結構勢い強いな、ゲリラ豪雨か？ とりあえず、校舎に戻るぞ」

これ以上体を濡らさないように、俺たちは急いで校舎を目指した。

「あーあ……もつこりんなにびしょ濡れだよお……」

吉良が生徒玄関で濡れた髪を拭きながらぼやいた。

雨はまだ止まず、むしろ勢いを増している。下校時刻までに止めばいいんだが……。

「……確か、次で最後だよね、七不思議。“知らない同級生”

「ああ、そうだな」

七番目。最後の不思議。

「そういえば、この話だけ妙に細部が曖昧つていうか、なんか変だよね……」

「……そうか？」

「うん。なんて言えばいいのかわからないけど……あ、やっぱ吉良が、何かを思い出したよう」「うう、いやらしく向き直る。

「学舎くんには言つたことなかつたっけ。わたし、実はそして、吉良は話し始めた。

ようやく雨の勢いが収まってきた。あと数分もすれば止むだろりか。

「雨が上がつたら帰るぜ。もつ、取材は終わつたようなもんだろ」「えつ？ でも……」

納得していないうきの吉良にだめ押ししてみる。「最近物騒だしな。なんなら、家まで送るから」

「えつ、本当に！？」

ぱあつと吉良の顔が明るくなる。

ああ、そういうえば、俺からこんなことを誘つのは初めてだつたかもしれない。いつも吉良のほうから誘つてきて、俺はいつも適当な言い訳でかわしているだけだつた。

……なんでそんなに、俺なんかと一緒に帰りたがるんだ？

「カバン取つてこいよ。俺はここで待つてるから」

「うん……あれ、学舎くんはいいの？」

「何言つてんだ。俺はずつと持つてるだろ？」「

俺は通学力バンを掲げて見せた。

「持つてたんだ。全然気づかなかつた……」

意外そうに吉良が言つ。まあ、そだらうな。

「じゃあ、ちよつと待つててね」

吉良がぱたぱたと駆け出していく。左右のおやげが尻尾のよつて跳ねていた。

外から聞こえる雨の音が少しずつ小さくなつていいく。そろそろ雨があがりそうだ。

「……ずっと降つてりやいいのにな」

「こんなこと吉良には言えないが、つい口をついて出でてしまった。
なんとなく手持ちぶさたなので、カバンからノートを取り出して
みる。

何の気なしにぱらぱらめくつて見る。これは新聞部に入つて以来、
取材メモや記事の下書きに使つてきたものだ。当然、俺以外の人が
書いた文字はない。

「……おつと」

ノートに挟まっていた紙の切れ端が落ちた。メモか何かだろうか、
とりあえず拾つてみる。

『Curiosity killed the cat!!』

「…………」

見覚えのある殴り書き。いつのまにか、こんなところに挟まつて
いたのか。

「結局、これは誰が書いたんだろうなあ……」

吉良ではないだろう。吉良はもう少し丸っこい字を書く。それに、
吉良にはこんな文面を書く理由がない。

そんなことを思案しながら外の景色を眺めていると、背後からゆ
っくりと足音が近づいてくるのを感じた。

「吉良か？ 隨分早かつたな」

『な』まで言い切ることはできなかつた。

突如、俺の後頭部に硬くて重いものが叩きつけられたからだ。

「つ、ぐあつー！」

衝撃で身体がよろめき、視界が点滅する。ノートがばさりと床に
落ちた。どうにか倒れるのを踏みとどまり、殴ってきた相手を振り
向く。

「一体、何を つうぐ！」

振り向き終わる前に右側頭部を殴られ、今度こそ俺は床に倒れた。

頭が一回も揺さぶられ、視界がはっきりしない。相手が男で凶器は金槌であることはどうにかわかつたが、顔はよく見えない。

なんなんだ。一体何が起こってるんだ？ なんで俺は襲われているんだ。いきなり殴られるのは初めてじゃないが、金槌で何度も殴られたことも、殴られる覚えもない。くそっ、とにかくこいつから逃げなければ……！

「つぐ、ああっ……！」

立ち上がろうと床に手をつぐが、男に思いきり踏まれ、呻き声が出来る。左手の骨がみしみし軋む。

「…………」

男は無言でもう片方の足で俺を蹴り、体勢を横向きから仰向けにする。そのまま俺に馬乗りになると、再び金槌で俺の頭を殴りはじめた。

「があっ、ぐっ、ぐあっ…………！」

くそっ、くそっ！ 両足と右手は男の両足と左手によつて封じられ、左手は痛みで動かない。痛い、痛い痛い痛い痛い！ 額に痛みが幾度も打ち付けられ、まるで自分が釘になつたかのような錯覚を味わわされる。

そのうち額から血が吹き出してきた。それでも男は殴るのをやめず、むしろ殴るペースを早めてきた。血が目元にまで流れてきて、目に染みて開けていられない。

めきり、と額から音がした。床に寝ているはずなのに、何故か身体がどんどん沈んでいくような心地よい感覚が襲ってくる。

……参ったな。どうやら吉良との約束は破つてしまつことになりそうだ。

一回目の『めきり』を聞く前に、俺の意識は沈んでいった。

吉良美善は焦っていた。学舎を待たせすぎで彼を怒らせてしまわないか危惧していた。

吉良が部室に着いたとき、またもや部室は何者かに荒らされた。それを片付けているうちに、予想外に時間がかかってしまったのだ。

すぐに学舎の元に戻り、事情を説明して手伝つてもらひればよかつたのだが、彼女にはそいすることが出来なかつた。

ホワイトボード一面にでかでかと書かれた『Curiosity killed the cat!!』の文。それを、学舎に見せたくなかつたのだ。

「イタズラにしたつて酷すぎるよ！ どうしてこんなことするんだろ？……」

階段を駆け降りながら吉良は一人憤る。

「学舎くん怒つてないかなあ……」

最後の数段を飛び降り、生徒玄関まで走る。優等生のよつた見たいには似合つていない姿だつた。

「学舎くんつ、遅れてごめんつ！」

生徒玄関につくなりそう叫んだ彼女だつたが、そこに学舎の姿はなかつた。

「あれ……学舎くん？」

遅いのを怒つて先に帰つてしまつたのだろうか。狼狽える吉良の足が何かを蹴つた。

「これつて……学舎くんのノート？」

何故これがこんなところに落ちているのだろうか。と、そのとき後ろから声をかけられた。

「吉良じやないか。なんでまだ学校にいるんだ？ 今日は中間試験二週間前だから、早く下校しなさいと言われなかつたのか？」

「あ……浦賀先生」

声の主は見慣れた英語教師だつた。教科書等が入つたバスケットを抱えている。

「浦賀先生、学舎くん見ませんでしたか？ ここで待ち合わせしてたんですけど……」

「学舎？ さあ、見なかつたな。先に下校したんじゃないかな？」
先生は首を振り、「君ももう帰りなさい。試験前なんだから部活
は禁止だぞ」と言つて去つていった。

「……やっぱり、帰っちゃつたのかな？」

ふと、ノートに何か紙切れが挟まつてあるのに気がついた。
「これって……」

ホワイトボードと同じ内容が書かれた紙切れ。吉良の心拍数が大きくなつていく。

「学舎くん……」

背筋に言い様がない寒気が走り、吉良は思わずノートを抱き締めた。

空は晴れ、西日が外を照らしている。吉良は、自分が知らないと
ここで何か恐ろしいことが起こっているような、そんな不安に襲わ
れていた。

学校の七不思議 5（後書き）

怖さが出せない…！

いよいよ大詰めです。あと一、二話で終わるかな？

学校の七不思議 6（前書き）

失つて初めて気づく大切さ。

だったら失う前に気づきたかったけど、人生なんて大体そんなもの。後悔なんて先立たないんだから、先のことを考えようじゃないか。

学舎学徒が姿を現さなくなつて二日経つた。

初めはあのとき待たせたことを怒つてゐるのだと思つた。二日目
もまだ怒つてゐるのか、それとも試験前だから来ないだけかと思つ
ていた。二日目にはそろそろ脾れを切らし、そして、気づいてしま
つた。

四日目になり、吉良はようやく行動を起こした。

「みよちー、一緒に帰る？」

放課後になり、友達の松前知朱が声をかけてきた。

「うつん、じめんね。今日はちょっと、図書室に行こうと思つてゐるの
勉強？」

「まあ、そんなどこかな」

適当に言葉を濁して、ふと思つ、

（……学舎くんもよく、いつもして何かを誤魔化してたつけ

「……どうかしたの？」

「う、うつん、なんでもないよ」

じゃあね、と手を振る。松前が手を振りかえしてくるのを確認し、
吉良は教室を出た。

行き先は図書室。博識で気まぐれで、学舎の数少ない友人である
“魔女”がいつもいるところ。

吉良が唯一知る、学舎の“知り合いで”的りである。

そして、“魔女”鮑木真女はいた。

若山のようなシルエットの帽子を被つた少女は、薄暗い図書室の
貸し出しカウンターを、生まれたときからここに座つていたかのよ
うな自然さで陣取り、寂しそうな、退屈そうな、つまらないそうな表
情を浮かべながら文庫本を開いていた。

タイトルは『蜘蛛の糸』。言わずと知れた芥川龍之介の代表作の一つである。

「……うん? 吉良さん? どうしたんだい、こんなところに来て」

鉋木が吉良に気づく。文庫本に本を挟んでカウンターの端に置き、問い合わせてくる。

「ちょっと、鉋木さんに訊きたい」とがって、「

震えそうになる声をどうにか平常に保ち、言葉を紡ぐ。

「学舎くんのこと、知ってる?」

「……吉良さん」

鉋木は感情を押し殺した声音で言う。

「学徒君がいなくなつたのは僕も知ってるよ。でも、どうしていなくなつたのか、どこに行つてしまつたのかは知らない。僕にもわからないんだ」

「……そつか」

と言いながらも、吉良はまったく落胆していなかつた。そんなのは当たり前、当たり前のことを当たり前だと再確認しただけだと、そんな顔をしていた。

「ううん。わたしが訊きたいのは、そういうことじやなくて。学舎くんのこと

「学舎くんのことを、教えてほし」の

鉋木には、吉良が何を言いたいのかよくわからなかつた。

「……ううん? 『じめん、吉良さん。君の言いたいことがよくわからん』いんだけど……」

「その、学舎くんがどうなつているかが知りたいわけじやなくて、あ、いや、わかるんだつたら知りたいけど……とにかく、わたしが知りたいのは、学舎くんの人となり」

「人となり?」

「うん」

吉良は、いよいよ自らの感情に歯止めが効かなくなってきたのを自覚していた。必死にせき止めていたものが、堰を切つて溢れ出そ

うとしていた。

「わたし、学舎くんのことなんて何も知らなかつたんだよ。学舎くんのことなんて、なんにも」

「学舎くんが何組なのか……」「うん、そもそも何年生なのか？」

「孝介くんのお稼とか、河人家族で兄弟はいるのか」と

「学舎くんの好きなもの、嫌いなものとか」

「学舎くんがビーハイで前髪を伸ばしたのがどう

「学舎くんが好きな女の「子のタイ」とか」「

「わたし、学舎くんの」となんて、なんにも知らない

「知らない、知らない、知らない、知らない、知らない、知らない、

「なんにも、なんにも知らないんだ……！」

「アラビア語」

氣がつくと吉良は鉗木に抱き止められ、身體を、抱木が支えてくれたのさ。

「……鮑木さん」

「吉良さん、わかつたから。わかつたから落着くんだ」

「やうやう、僕だつて知りはーべ。なんでもつてーる必要があるん
ぐする赤ん坊をあやすよーに」鎧木は優しく抱きの體中をわする

だい?
」

「でも、でも……！」

知らないなら教えてもらおう。

ふいに、鮑木が帽子を脱いだ。隠れていた黒いショートボブが姿を見す。

を現す。

「鉋木さん……？」

「これ、貸しておくれ。出番がない」と祈つてゐたが、
やがて、うとうと睡子を告げて彼女。

そして、ひょいと帽子を吉良に被せる。

「わっ！？」

帽子の鍔で視界を遮られ、思わず吉良は慌てた。

「返すのは学徒君が見つかってからでいいから。僕はもう帰るよ、ちょっと会わなきゃいけないヤツがいるんでね」

「わ、ちょっと、鮑木さん！？」

帽子を正すと、鮑木は既に図書室を出てしまっていた。薄暗い部屋に吉良は一人残される。

「どうしたんだろ……一体」

鮑木が残した帽子を脱ぎ、改めて眺めてみる。

「……やっぱり、ちょっと変な形……」

図書室を出た吉良が次に向かった先は、新聞部の部室だった。

これには特に意味はなかった。学舎が行方不明で、部活が禁止になつてゐる今、吉良が部室に来る理由はない。

だが。

「もしかしたら学舎くんが来てるかもしれないもんね

まあ、結局誰もいなかつたわけだが。

「……あれ？ だつたらなんで鍵が開いてるんだろ……」

部室の鍵は職員室にあるマスターキーを除けば二つしかない。新聞部には顧問がいないので、吉良と学舎がそれぞれ一つづつ管理している。

昨日部室に来たときはしつかり閉めたはず。かといって、たつた一人の弱小新聞部に誰か先生が来たとは思えない。いずれにせよ、鍵が開いているはずがないのだ。

「…………」

吉良は嫌な予感に苛まれながら、ゆっくりと室内を見回した。

そして、あつた。ここに確かに何者かが来たという証拠がホワイ

トボードに残されていた。

なんとなく見覚えがある筆跡だが、学舎のものではない。

「校舎裏……？」

吉良には呼び出される理由が思い当たらない。少なくとも、告白かカツアゲのどちらかにしか使われないような場所に呼び出される覚えはなかつた。

腕時計で時刻を確認する。四時五十分、図つたようなタイミングだ。

「…………」

もし学舎くんがいたら、と吉良は考える。もし学舎くんがいたら、こんなのはイタズラ書きだ、無視してさわると帰らひざつて言ひつんだろう。

そしてわたしが帰つたのを見計らつて、一人でそれを確かめに行くんだ。

「…………」

これを書き残した者が何を考えているのはわからない。学舎のことを知つているのかもしないし、知らないのかもしないし、悪意を持つているのか善意を持つているのかもわからない。

「でも、たまには部長らしく矢面に立たなきや」

学舎くんにばっかり任せられないよ。そう呴いて、吉良はホワイトボードの文面を消す。

そして、今度こなしつかりと両締まりをして、部屋を出た。

その決断が、吉良にとつて、そして何より学舎にとつても最悪だったことを、吉良はまだ知らない。

学校の七不思議 6（後書き）

次の話で終わればタイトル的にもいい感じだったんですが、あと一
話 + になりそうです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1145w/>

放課後ホーンテッド

2011年11月4日03時20分発行